

ヴェーユと実存主義者たち⑥

村 上 吉 男

これは前号に続く拙論である。⁽¹⁾

さすればサルトルにあって、〈認識論〉が〈存在論〉に先行してかたちづくられていたといわなくてはならぬだろう。つまり彼が自らの〈理性（知性）〉の能力の助けを得て、自らの〈意識〉内に生じさせる〈即自存在〉や〈対自存在〉なる各用語をつくり出しては、〈即自〉や〈対自〉が各「在る（存在する）」かを質し、〈即自存在〉を〈対自存在〉にすべき〈存在論〉に仕立て上げ、その何たるかを主張すればするほど、彼に〈存在〉を〈即自〉や〈対自〉と命名させたり、その〈即自存在〉を〈対自存在〉に向かわしめるべく、論理立てを試みさせたりし得る、〈理性（知性）〉による〈認識論〉が、しかも筆者にすれば、かかる〈存在論〉さえ成り立たせる、〈理性（知性）〉を中核にするしかないと捉えさせずにいない〈認識論〉が〈存在論〉研究以前になければならなかったということである。かつこれ以降の論述において、筆者は彼自身の〈理性（知性）〉を、またこの駆使によって打ち出された〈存在論〉的諸用語を彼のそれらとみなさずに、〈人間（意識）存在〉の〈理性（知性）〉や〈即自〉〈対自〉を一般をさしていわせる〈現存在〉や〈本来的存在〉の語として使うと断わりおく。要はこうした〈理性（知性）〉の語や〈存在論〉的用語（なる名称）が彼にだけでなく、斯界で流布されるように、そのうえ筆者にとっては〈認識論〉にさえ通用されるようにみえたところで、筆者は彼に〈存在論〉の組み立てに用いられた諸用語が〈認識論〉から借り受けたそれらで成ると指摘し得たことに変わりはないと強調せずにおれないのだ。

そこで筆者はこの〈認識論〉について、サルトルに代表させて繰返しおくと、〈認識論〉とは〈理性（知性）〉のもとに〈論の筋道〉をたどらせねばならぬ、例の〈必然性〉に従って求められる「知る作用」であつたし、周知のように、〈認識論（知る作用）〉には、〈理性論〉とも呼び得る〈観念論〉と、〈感覚論〉や〈経験論〉ともいい換え得る〈實在論〉とが含まれて捉えられることをさした。彼に窺えよう〈認識論（知る作用）〉はこれもまた疾うに触れた通り、〈観念論〉であつて、〈實在論〉ではなかった。「〈實在論〉ではなかった」と断じるはなぜかもすでに一見したし、また後段で外的〈世界〉（現実）を語るときに改めて問うことにし、ここではまず、彼が

〈存在論〉を打ち立てるに心血を注いでいたと受け止められるせいか、これに比べては、筆者の主張である〈認識（観念）論〉研究に掛けた時間がさほど多かったようにはみえないと指摘しておかざるを得ない。それでも筆者が〈認識（観念）論〉の方が〈存在論〉の組み立てより先にくるといい得るは、彼が自らの哲学（存在論）を成り立たせんとする際に、その原動力が何かと確認するにあつて、何かにはこれまで何度もみてきた、〈意識〉の「行動（運動）」である諸能力の働きが、なかでも彼が〈論の筋道〉のことを強調するかぎりでは、〈理性（知性）〉能力の働きが宛がわれていなければならないからである。彼だけでなく誰にでも駆使できよう、この〈理性（知性）〉によってでなければ、再度いうように、彼が〈人間（意識）存在〉をば〈即自〉や〈対自〉と各名付けた用語を持ち出し使用することは不可能であり、ましてこれらの用語を関係させる、さらなる〈思惟（認識）（観念）〉なしに、要は〈理性（知性）〉なしに、〈存在論〉が語られるとはそれこそ誰も予想すらできないであろう。だからこれと同じことが筆者の主張する〈認識（観念）論〉にも当てはめられねばならなくなる。つまり〈理性（知性）〉を深くいかにか働かせて用いることが〈認識（観念）論〉用語とこの「知る作用」の機序を彼に見出させていたし、筆者にすれば、その〈理性（知性）〉から成る〈認識（観念）論〉がそのまま〈存在論〉に展開されたと受け取るほかない、要は〈理性（知性）〉は〈存在論〉より〈認識（観念）論〉に繋がる関係で用いられていたのではないということである。

しかし、筆者がサルトル哲学に対し、〈認識（観念）論〉なくば〈存在論〉すら日の目をみないとは断じたとして、筆者に〈存在論〉が優先されないといわせるは何かである。〈認識（観念）論〉と〈存在論〉にあつて、〈認識（観念）論〉が先きに立たねばならぬ理由は、〈意識存在〉と〈わたし（の存在）〉が別々にされる扱いにあると、同時にこれらに対する外的〈世界〉（の存在）の見方にあると読むことができる。だから以下で筆者なりの、かかる証明が課せられる。〈理性（知性）〉を働かせて得た用語〈意識（即自）存在〉に、彼はたとえば〈無〉すなわち〈自由〉が見出せるとはいわなかった。彼がそう判断した一方で、その〈無〉すなわち〈自由〉を〈意識（対自）存在〉にかかわらせると理解したことも、彼の〈思惟（認識）（観念）〉によるほかない。つまり、彼が打ち出す〈意識（対自）存在〉に〈無〉や〈自由〉を関係させては、〈意識（対自）存在〉が既出した諸引用文でみた通り、〈無〉すなわち〈自由〉になるとされる思想（言語表現）に頼らずに、要は〈意識〉での〈思惟（認識）（観念）する〉〈能動〉的能力とその〈思惟（認識）（観念）たる〉〈受動〉的能力の働きを抜きに、これも〈意識（対自）存在〉のいい換えの表現でしかない〈実存（存在）〉は彼にとって不可能であるということだ。だが〈意識〉は〈思惟（認識）する〉ことで得る、〈無〉すなわち〈自由〉なる〈観念〉に立たせられるだけで、〈無〉すなわち〈自由〉が即座に〈意識（対自）存在〉に実現される、換言すると〈意識（対自）存在〉をして〈実存（存在）〉を、ハイデッガーにいわせよう「本来的存在」を可能にさせるわけではな

かった。しかり。なぜならすでに触れおいたように、彼の場合でも、〈理性（知性）〉があれやこれやと〈思惟（認識）（観念）する〉ことにあろう〈認識（観念）論〉は〈意識〉内でのかかる能力の「行動（運動）」をあらわす「知る作用」にすぎなかったからである（彼にいう〈認識（観念）論〉は〈意識（即自）存在〉（現存在）である、脳の〈理性（知性）〉能力の操作によって生じた〈認識（観念）〉を述べ語る論でしかなくなるのであり、その〈認識（観念）論〉としてもたらされた諸用語が先きになければ、彼が〈存在論〉で主張する、例の〈意識（対自）存在〉の用語さえ「在る（存在する）」と断じる見通しもつかなくなろう）。したがってこの〈無〉すなわち〈自由〉を現実にするには〈意識（即自）存在〉がそれ自身をば〈投企〉などという、新たな〈思惟（認識）（観念）〉に委ねなければならなかったし、こうした〈思惟（認識）（観念）〉はもはやそれにとどまってはならず、実際の、その「行動（運動）」に変わっていなければならなかったのである。

なぜかといえば、〈意識〉内での、〈理性（知性）〉能力の「行動（運動）」（働き）による、〈投企〉〈参加〉〈行動〉や〈選択〉という各〈思惟（認識）（観念）〉に終始させるのではなく、このそれぞれを現実の「行動（運動）」に結びつけるだけが〈意識（即自）存在〉の〈意識（対自）存在〉への〈実存（存在）〉を現に可能にすると繰返し得るからである。「現実の「行動（運動）」」とは上記中の〈投企〉を例にするまでもなく、〈投企〉を実行させていることである。しかもサルトルに〈わたしは、…投企である〉と語らせるかぎり、〈投企〉のいわば実行者は〈わたし〉であって、〈意識（即自）存在〉ではないということになる。その〈投企〉に関しては以下のようにまとめられよう。何より〈投企〉は〈意識（対自）存在〉に向かわせると〈思惟（認識）（観念）する〉、この〈意識（即自）存在〉における〈思惟（認識）（観念）〉であった。このことはしかし、〈意識（即自）存在〉内での〈理性（知性）〉能力の「行動（運動）」（働き）に因ったにすぎないのであり、〈投企〉を実践（実行）させることとは別であった。実践としての〈投企〉の当事者はそのうえ〈わたし〉であった。だから〈意識（即自）存在〉での〈思惟（認識）（観念）〉でしかない〈投企〉がそれ自身外的〈世界〉（これも後述に譲る）にかかわるといえるは不可能であった。筆者は人に、今この外的〈世界〉に居る場から〈投企〉をめざす場へと身体をともにした移動を試みさせる「行動（運動）」を「現実の「行動（運動）」」である〈投企〉と読むほかないからして、こうした〈投企〉がもはや〈意識（即自）存在〉内での〈理性（知性）〉能力の「行動（運動）」（働き）による〈投企〉でないのは当然のことになるし、だからこそ身体を伴わせて「行動（運動）」し得る、かつ〈意識〉でなしに、〈わたし〉としての〈投企〉でなければならぬといえるわけだ（それゆえ彼にいう身体が〈わたし〉に関係せずにはいないかどうかをものに検討しておかねばなるまい）。だが〈対自〉を可能にしよう〈投企〉が〈自己（わたし）〉を意識として正当化するために）役立つとされるような、この既出引用語句の参照によって、筆者は〈思惟（認

識(観念))たる〈投企〉をして〈自己(わたし)〉を意識として正当化)せしめると読むことができるのか。否である。〈自己(わたし)〉は〈観念〉上の〈わたし〉ではない。〈わたし〉は〈投企〉の実行者であった。だからこれとたんに〈観念〉にすぎない〈投企〉とは別であるのだ。つまり〈わたしは、...投企である〉と書かれた関係での〈投企〉は〈投企〉を実践する〈わたし〉をさしたに等しいからして、〈意識(観念)〉にしか抽出されない〈投企〉ではすでにない。そこに注意しないと、こうした〈わたし〉すなわち〈投企〉は〈観念〉上の〈投企〉にみられかねなくなる。このことはまた、彼が〈わたし〉を〈他者〉とみなすところからも、〈わたし〉を意識として正当化)させ得ぬことを窺わせてこよう。〈わたし〉が〈意識〉に与しないとみるはその〈観念〉が〈わたし〉を〈他者〉といわせる以上、〈わたし(他者)〉は〈意識(観念)〉以外の対象に、それでいて〈観念〉なる〈意識(即自や対自)〉にかかわる対象に位置づけられていなければならなかったからである。〈意識〉の〈即自〉をばその〈対自〉に導かせんとするためには、〈投企〉が〈思惟(認識)(観念)〉されねばならぬと、かつ筆者にとって、この〈投企(観念)〉を実行させるべき〈わたし〉が持ち出されるようになったと指摘し得ることで、〈投企〉なる、現実の「行動(運動)」が〈わたし〉に託されるし、こうしてはじめて、〈わたし〉は〈観念上〉の〈意識(即自)〉を〈意識(対自)〉に実現させられるそうであり、それなしに、〈わたし〉もまた〈実存(存在)〉することに、要は〈わたし〉の〈存在〉を確認できることにならなかったのである(筆者が今「〈わたし〉もまた」と記したは〈わたし〉を後述しよう〈統合〉の問題に関連させねばならないと思えるからである)。

サルトルが〈意識〉の現象を彼なりの〈観念〉用語をふんだんに用いては、その解明に主力を注ぐなかに(このことは筆者には彼が〈認識(観念)論〉に立たずば成らなかったと受け取らせ得るし、後述も課さねばならぬことになる)、彼がそのうえ、筆者にしては〈意識〉自体に捉えられない〈わたし〉を登場させざるを得なくなったはもとより、〈意識(観念)として〉の〈投企〉にとどまらせないために必要な〈わたし(投企)〉でなければならぬと推察し得るからである。したがってかかる〈わたし(投企)〉とみなされないことには、〈投企〉は〈意識(即自)〉内の「行動(運動)」で得た〈投企(観念)〉になるほかなく、それこそ彼に主張される〈存在論〉も〈観念〉の所産にすぎなくなるし、ましてや例の〈わたし〉ならびに〈わたし〉の〈存在〉や、例の外的〈世界〉ならびに外的〈世界〉の〈存在〉を〈存在論〉として打ち立てることは不可能になる。〈わたし(投企)〉の仲介なくば、筆者にいわせると、彼が〈観念論的立場を完全に放棄する〉と宣言していたにもかかわらず、およそ〈認識(観念)論〉に立って構想されたとみえる〈存在論〉さえ可能になるとは断じられなくなろう。そこで彼のめざす哲学が〈存在論〉か、はたまた筆者にいう〈認識(観念)論〉であるかを、彼が〈人間と世界は相対的な存在であり、...相対的な関係は人間存在から世界に向かう関係になる〉と語る引用文に再度注目し、以下でこれ

まで提起してきた問題とともに、答えおく必要がある。

前記引用文の後半文章は筆者が「人間の世界への関係」と記し言及したことに同意であるし、ここからはサルトルが「世界の人間への関係」を問うた跡形も、要は〈認識論〉の一なる〈実在論〉を質した形跡も窺えなくさせられる。この上記の「人間の世界への関係」や「世界の人間への関係」に関し、まず答えおかなくてはならぬは、その引用文中の〈人間存在〉また筆者にいう「人間」(なる表記)は「人間の世界への関係」にあつてさえ、〈意識(即自や対自)(各存在)〉をさすだけであり、〈わたし(の存在)〉のことではなかったと。要は〈人間(存在)〉は〈わたし(の存在)〉を語るよりも、むしろかかる〈意識(存在)〉によって構成されることに、またその〈即自や対自〉と各命名し得たり、〈論の筋道〉を〈守〉り得たりする〈理性(知性)〉によってかたちづくられることにあつたと。次に、〈人間(存在)〉の中核を占める〈意識〉は、彼が〈(人間と世界の)相対的な関係は人間存在から世界に向かう関係になる〉ところで〈投企〉という〈観念〉を仲立ちに〈即自〉から〈対自〉にされると強調するようにみえども、筆者からすると、現実にては〈意識〉が〈世界に向かう〉、当の対象にはなり得なかったと。なぜなら外的〈世界〉と〈関係〉するとみえるは〈意識〉ではもはやなく、〈わたし(投企)〉でなければならなかったからである。そして、〈意識〉と〈わたし〉や外的〈世界〉の〈関係〉はいかにあつたのかである。前記したように、〈わたし〉や外的〈世界〉は〈意識〉にとつて、〈他者〉にさせられていたのだから、〈わたし〉にかぎっては少なくとも、〈意識〉そのものにみられるのでなく、しかし「それでいて」と述べ続けた通り、〈わたし〉は〈即自〉や〈対自〉という各〈意識〉に「付け足しにされた」ことになっていなければならなかったと。繰返しいうが、〈思惟(認識)(観念)〉することで、〈即自(存在)〉を〈対自(存在)〉にさせるべくもたらされた〈投企〉は、それゆえ〈意識(即自)〉で成り、しかもこの〈投企〉をして〈対自〉たらしめたときの〈意識〉をば再び〈即自〉に戻さんとするに役立つとも、これらのことはすべて〈意識として〉の〈思惟(認識)(観念)〉による現象をあらわしたにすぎない以上、こうした〈意識(即自や対自)〉は何は無くとも、〈わたし(投企)〉なくして、その〈わたし〉や外的〈世界〉に〈関係〉させることができなかったと。なぜなら現実での〈わたし(投企)〉にあつて、〈わたし〉は〈意識(即自や対自)〉に、外的〈世界〉はこの〈わたし〉に各「付け足しにされた」〈関係〉以外に、〈意識〉と〈わたし〉や外的〈世界〉の〈関係〉がなかったと捉えられるからである。

筆者はここに、サルトルが〈意識は何ものかについての意識である〉と記した既出引用文に加えて、〈わたしが実際この机を意識するためには、わたしはこの机を意識することを意識するだけで十分である〉⁽²⁾と述べた文章を取り上げ、〈わたし〉が〈意識〉に「付け足しにされた」とみたことを証明しておかなくてはならなくなる。二引用文中の語句にあつて、当然のことながら、まず前者の訳語〈意識である〉は〈être conscience (de)〉であり、後者の訳語〈意識

する)は〈avoir conscience (de)〉であることが、そして二引用文の主語はそれぞれ〈意識 (la conscience)〉と〈わたし (je)〉であることが確認される。それに筆者が前者での〈de〉を〈についての〉と訳したのに倣って、後者の〈de〉にも「についての」を当てはめ得るならば、後者を〈わたしはこの机についての意識を持つ〉といい換えて訳することができるであろう。以上を踏まえると、上記した「証明」は筆者が次のように語り得て成ろうといわなければならない。前者中の訳語〈何ものか〉を後者中の〈この机〉に置き換えて、前者をば、〈意識はこの机についての意識である〉と、さらに〈意識〉が〈この机についての意識を持つ〉表現に等しくさせるといえるならば、こうした〈意識〉こそそれ自らが〈意識する (意識を持つ)〉〈意識である〉とされるのであって、〈わたし〉であるとは即座にいつてはならないことが明らかにされよう。このことはすでに「〈意識〉すなわち〈わたし〉」でないとい見していたことでも確かめられることである (ここに彼の哲学の中核が〈意識〉にあることを証しする)。しかるに後者の引用文で、彼が〈わたしは...意識する (意識を持つ)〉とも述べたは何を示唆させるのかである。この文章は確かに、〈わたし〉が〈何ものか〉を〈意識する〉、要は〈何ものか〉の〈意識を持つ〉ことを語らせるからして、〈意識〉と無関係でなくなる。彼が「無関係」にさせない、そのことは、たとえば前者引用文中の主語〈意識〉を後者引用文中の主語〈わたし〉に代えてまで〈わたし〉を登場させてかわらせねばならぬことをさすのであり、何度も指摘した通り、この〈意識〉とのかかわりにあつては、〈わたし〉が〈意識 (即自や対自)〉に「付け足しにされた」関係にしてみてもおかねば、〈わたし〉は〈意識〉自体であり得ずとも、〈意識する (意識を持つ)〉表現にし得ないにちがいない。つまり、〈わたし〉は〈意識〉のなかの〈他者〉であり、またかの〈投企〉 (など) を導き出す〈意識 (即自)〉に従って、〈投企〉 (など) を現実「行動 (運動)」させるのが〈わたし〉になるといわせたのだから、〈意識 (即自)〉と〈わたし〉はそのように関係するほかなく、これは少なからず「〈意識〉すなわち〈わたし〉」という関係にはないことを意味させるわけである。〈意識 (即自)〉が〈わたし〉のこゝとを持ち出させ、その〈わたし〉に〈投企〉 (など) を促すことにより、〈わたし (投企など)〉は〈意識〉を〈対自〉にさせるべく、〈意識 (対自)〉に結びつかせると、要するに〈意識〉は〈わたし (投企など)〉なかりせば、その〈実存 (存在)〉たる現実 (対自) を現出せしめ得ないのであり (〈投企など〉と記したは当の〈投企〉を筆頭に、〈参加〉〈行動〉や〈選択〉のこゝとをさした)、〈わたし〉がこうした〈意識 (即自や対自)〉に「付け足しにされ」てはじめて、かかる〈意識〉にかかわる〈関係〉をかたちづくるといわねばならぬのだ。

筆者はここで、「〈わたし〉が〈意識 (即自)〉に「付け足しにされた」」とみなしたことを、既出引用文に借りて明らかにしてみることとする。まずこの一は〈意識は認識されるかぎりではなく、存在するかぎりでの認識する存在である〉既出引用文である。その後半語句の〈存在

するかぎりでの)や〈存在である〉と記されたところから、〈存在(する)〉は繰返すまでもなく、〈意識(即自)〉をさし示す〈存在〉でしかないことになる、〈意識は認識されるかぎりでの〉とされる前半語句は省略語句としてあろう、後半の同じ〈認識する存在である〉に掛かると読み得るのだから、〈意識(即自)存在〉が〈認識する〉という〈能動〉能力〈思惟(認識)(観念)する〉や〈認識される〉という〈受動〉能力〈思惟(認識)(観念)〉を有するとみえるは確かなことである。むろん〈意識は認識されるかぎりでの(認識する存在である)〉と表記できたとして、誤解されてならぬは、〈意識(即自)存在〉が〈認識する〉〈認識される〉〈能動〉と〈受動〉の機能を発揮されると受け取らねばならないことにあるし、そこで注意すべきは、外的〈世界〉からの、いかなる対象も受容されないと、要はこの〈認識される〉は〈認識する〉と同様に、あくまで〈意識(即自)〉の働きによってもたらされる以外にないということにある。だから〈わたし〉の方に対しては、〈わたし〉は〈認識する〉〈認識される〉機能を持ち合わせないといわねばならぬわけである。このことは〈わたし〉には〈能動〉と〈受動〉の能力がないこと、とどのつまり〈わたし〉は〈意識(即自)〉であり得ないことを、しかし〈わたし〉は〈意識(即自)(存在)〉に、その能力に「付け足しにされた」ことを含意させずにいない。筆者がなかでも、「〈わたし〉は〈意識(即自)(存在)〉に、その能力に「付け足しにされた」と指摘したうち、「〈意識(即自)(存在)〉に」に対することでは前段に記した引用文が、つまり〈わたしが実際この机を意識するためには、わたしはこの机を意識することを意識するだけで十分である〉が明らかにしよう。この既出引用文によると、〈わたしはこの机を意識することを意識する〉とされるのだから、最初の、〈この机を意識する〉という〈意識する〉は〈意識(即自)(存在)〉のいわば仕事であり、かかる仕事に基づいて、その文章中の主語〈わたし〉はこれを動詞〈意識する〉ことができる順に配置されたと、換言すると〈わたし〉は〈意識(即自)(存在)〉が〈この机を意識すること〉を〈意識する〉順になるとみえる以上、〈わたし〉はその〈意識(即自)(存在)〉に「付け足しにされた」としか捉えられはしないからである。「付け足しにされ」ていなければ、要は「〈意識〉すなわち〈わたし〉」とみられるならば、ひとつの〈意識する〉との表記でかまわぬし、それこそ〈わたし〉を〈他者〉にする必要はないはずである。またここに、〈この机〉について質すならば、〈この机〉はなるほど〈即自存在〉として「在る」外的〈世界〉の一〈事物〉や〈他者〉にすぎなくなるが、だからといって〈この机〉がサルトル(彼)を〈わたし〉にたとえていわせる、その〈わたし〉に〈認識される〉ことで〈わたし〉に生じるようにかかわるとみるのではなく、彼の〈意識(即自)〉をして〈この机〉を〈意識(即自)〉の対象に浮かばせることにより、換言すると彼の〈意識(即自)〉が外的〈世界〉に「在る」〈この机〉を対象にして〈認識(論)〉に関与させるのでなしに、〈意識(即自)〉それ自身で〈この机〉を〈認識する〉ことにより、〈認識される〉〈思惟(認識)(観念)〉として〈表象〉させ得ると繰返しおく。したがって〈わたし〉には〈認識する〉や

〈認識される〉つまり〈思惟（認識）（観念）する〉や〈思惟（認識）（観念）〉という能力がないと断じられると同時に、〈わたし〉は〈意識（即自）〉のかかる能力に「付け足しにされた」とする表現も成り立つといえるわけである。要は〈意識（即自）〉に、さらにその能力に「付け足しにされた」とみたからして、〈わたし〉は〈意識（即自）〉自身に、かつそのかかる能力の機能に代わることができないが、それでも少なからずおのおのとかかわっていると捉える以外にないのである。

そして「〈わたし〉が〈意識（即自）（存在）〉に「付け足しにされた」ことを明かすにちがいない、既出引用文の一は〈主観性の内部に存在を支えるは意識である。…意識は存在によって住まわされるが、しかし意識は少しも存在ではない〉といわせるそれである。二文章中の最初に記される〈主観性（の内部に）〉という語句を前記のごとく〈わたし（に）〉とみなし、〈わたしに（わたしの）存在を支えるは意識である〉といい換えることが許されるならば、この一文は〈わたし〉が〈意識（即自）（存在）〉に「付け足しにされた」ことを意味させはしないであろうか。しかし、もはやそう結語するしかないのだ。だが〈意識（存在）〉が何ゆえ〈即自（存在）〉でなければならぬのか。それは二番目の文章のうちの〈意識は存在によって住まわされる〉が答えてくれよう。なぜなら〈意識〉が〈住まわされる〉すなわち「在る（存在する）」〈存在〉は一方の〈対自は無である〉がゆえに、ここは〈即自〉を除いてないと見て取れるのだし、その〈意識（即自）（存在）〉とかかわっているために「付け足しにされた」といえるのが当の〈わたし〉にほかならなかつたからである。しかして二番目の文章の後半で〈意識は少しも存在ではない〉と語られたことはいかに解釈されるかである。〈意識〉で〈認識される〉〈思惟（認識）（観念）〉は〈表象〉だからして、〈意識〉自身の〈存在〉になり得ぬことをさすかと、あるいはここに〈わたし〉を持ち込んで、例の〈投企〉などを試みずにいない〈わたし〉が〈意識〉を〈即自（存在）〉のままにさせない（それゆえ〈意識は…存在ではな〉くなる）と読ませることを示すかと、はたまた全文章の三箇所記される訳語〈存在〉をば上記から順次〈わたしの存在〉〈即自存在〉とみたがために、残る三つ目の〈存在〉が何を含意させるかを問うては、彼にいう〈人間存在〉の構成に欠けよう〈存在〉が〈対自（存在）〉になることをいうのかとそれぞれに予想させられる一方、これも全文章中に三度使用される訳語〈意識〉の方はしかるに、すべて〈即自（存在）〉を示唆させていると捉えられるかぎり、〈意識は少しも存在ではない〉と断じられた〈存在〉は〈意識〉自身が〈即自（存在）〉であることをさすに間違いないとみられども、筆者にはサルトルがかかる文意をして、上記の一として掲げた、〈意識（即自）〉の能力機能によって生じる〈表象〉を意図せしめたとみなすことでしか、ここに取り上げた問いに答えられなくなる。要は〈存在ではない〉はこうした〈表象〉を語ることを意味させるにあったのだ。これは先きに「〈表象〉は「在る（存在する）」と断じられぬ」と書いた通りである。さらに彼が前記した〈わたし（の存在）〉

や外的〈世界〉(の存在)をときに語りながら、それでいてときに〈対自(存在)は無である〉と主張することによってか、〈わたし(の存在)〉や外的〈世界〉(の存在)も各〈無〉にならねばならぬといわせたことで、筆者は外的〈世界〉のことはともかく、他方の〈わたし〉に対して「〈わたし〉は〈意識(対自)(存在)〉に「付け足しにされた」と表記したが、そのことは確かといえるか。しかりである。すでに触れたように、〈わたし〉が実際「行動(運動)」を起こす〈投企〉などを通し、〈意識〉の方はこの〈即自(存在)〉から〈対自(存在)〉へと向かうことができたのだから、そのうえは〈わたし〉は〈意識(対自)(存在)〉に「付け足しにされ」ていなければならない。なぜなら〈対自(存在)は無である〉ことをめがける〈対自(存在)〉はその〈無〉にあって、〈わたし(の存在)〉を〈無〉にさせ得ると、要するに〈わたし〉は〈意識(対自)〉の〈無〉にいわば連動して〈無〉になり得るといえたからである。はじめに〈わたし〉の〈無〉ありきというのではなかったのである。だから〈投企〉などを実行する〈わたし〉によって、〈わたし〉が〈無〉となるは、〈意識(存在)〉を〈無〉たる〈対自(存在)〉にさせたうえのことであるからして、〈わたし〉は〈意識(対自)(存在)〉に「付け足しにされた」かわりにあるといい得るのであり、ここは〈わたし〉が〈意識(即自)(存在)〉に「付け足しにされた」とみてはならない。それは繰返しになるが、一に、〈投企〉などをして〈意識(存在)〉を〈対自(存在)〉に向かわせ、〈対自(存在)〉を〈無〉たらしめてはじめて、〈わたし〉の〈無〉も成る順序にあるのだから、〈わたし〉は〈意識(対自)(存在)〉に「付け足しにされた」表現が可能であるし、一に、〈意識(即自)(存在)〉が〈対自は決して存在することがない〉と同意の〈無〉になることはないからである。また彼が〈自由はまさに、...人間存在に、...自らをつくることを強いる無である〉と語る〈自由〉すなわち〈無〉は〈意識(対自)(存在)〉のこの〈自由(無)〉によってこそ〈自ら(わたし)をつくる〉といえるのだから、かかる〈対自〉の〈自由(無)〉は〈わたし〉の〈自由(無)〉を〈つくる〉ことにも「かかわる」と見て取れるかぎり、〈わたし〉は〈意識(対自)(存在)〉に「付け足しにされ」ていなければならないわけである。

しからばその〈わたし〉ならびに外的〈世界〉についてはいかなるまとめをもって、結語づけることができるか。サルトルは〈意識は意識でない存在に注がれて生まれる〉と述べていた。したがって〈意識でない存在〉に当てはまる〈存在〉が〈わたし(の存在)〉や外的〈世界〉(の存在)になる。さらにこれらの〈存在〉に共通するは疾うに一見した通り、〈わたし〉や外的〈世界〉が〈即自存在〉(ただし〈わたし〉の方は〈意識(即自)(存在)〉に「付け足しにされた」とみえたから、〈わたし〉はこの〈即自存在〉そのものではなく)と、あるいはここに問わねばならない〈他者〉と呼ばれたことである(筆者は先きに、〈意識でない存在〉とは外的〈世界〉だけを掲げおいた)。ここからまたいえることは、外的〈世界〉に「在る(存在する)」〈事物とは、...意識でない(もの)として、(即自の)意識に現前しているものである〉と記されると同様に、

〈わたし〉は〈事物〉とも受け取つかまわぬことになる。この既出引用文の括弧内に付した語(句)のうち、「もの」の方は当然、上記に〈意識でない存在〉と表記された〈存在〉に置き換え得よう。だが〈わたし〉と外的〈世界〉には以上の共通点ばかりでなく、相違点もみられくる。それはおのおのにあって、〈他者〉すなわち〈事物〉である、いわばその居場所が異なると思えることにある。〈主観性の内部に〉と語られた〈主観性〉を取り込んだ、全体的な場所をば〈意識〉と見立てたとて、〈意識〉の〈内部に〉にあるほかないのが〈わたし〉になると捉えられねばならぬのだから、〈わたし〉は〈意識〉のなかに「在る(存在する)」〈他者(事物)〉であることになり(または〈わたし〉の居場所は〈意識(脳)〉の一部として形成されると読むこともできる)、外的〈世界〉は〈意識〉から離れた外部(周囲)に「在る(存在する)」諸対象の一いちをさすし、各対象をして〈他者(事物)〉といわせるがゆえに、対象としての〈他者(事物)〉になると理解される。ここで注意しておくべきは次の点だ。〈意識(即自や対自)〉でないところで〈意識でない存在〉と語られる〈わたし〉はなるほど〈意識(即自)(存在)〉の働きである〈認識する〉〈認識される〉ことで〈思惟(認識)(観念)する〉し〈表象〉されるとみることが可能でも、〈意識でない存在〉たる外的〈世界〉の方では、上記と同じく、〈意識(即自)(存在)〉自身に見出す、〈認識される(受動)(表象)〉対象を〈認識する〉、たとえば前記の引用文中の〈意識でない存在〉に注がれて(porté)という過去分詞を不定形にする「注ぐ(porter)」、かかる〈能動〉能力が働くのだから、ここにいう〈意識でない存在〉要は外的〈世界〉が〈意識(即自)(存在)〉をしてそこ(外的〈世界〉)からの対象の一いちを受容せしめられることにはおよそない、つまり外部にある対象に対して、〈意識(即自)(存在)〉は〈認識する〉〈認識される〉を作用させるのではないといわねばならない。加えて上記したところから、〈わたし〉には〈認識する〉〈能動〉〈認識される〉〈受動〉の能力がないといえるし、このことは外的〈世界〉でも同様である。だからか、〈わたし〉や外的〈世界〉はそれぞれ何も語ることができず、〈意識(即自)(存在)〉での、例の〈観念的な命題の脈絡〉をたどらせる〈必然性の観念〉に従って「在る(存在する)」ごとくに見受けられる。しかし〈意識(即自)(存在)〉がそれ自身で、〈わたし〉や外的〈世界〉をばかりか、〈意識(対自)(存在)〉をも〈思惟(認識)(観念)する〉ことにより生み出された、その各〈表象(観念)〉にあって、この各〈表象(観念)〉は確かに〈論の筋道〉を追いかけてさせる〈必然性の観念〉にしかみえねども、たとえば〈表象(観念)〉の一なる〈意識(対自)(存在)〉をば〈未来〉にかかわらせんとすることは彼が〈存在論(哲学)〉を企てていた、当初の〈意識(対自)(存在)〉をめがける、この〈表象(観念)〉では、かかる〈存在〉を問えるとはもはや断じてならず、たんにその〈観念〉に固執させるところの〈表象(観念)〉にすぎないことを語らせるし、さらに彼をはじめに、当初の〈意識(即自)(存在)〉の、〈わたし〉や外的〈世界〉の各〈表象(観念)〉を抱く人たちにとって、彼らのその現在や未来がいかに「在る(存在する)」かを予知すること

などではできないのである。このことは彼の哲学の一をかたちづくっていた〈意識（即自）（存在）〉がこれをも含め、上記した各〈表象（観念）〉の現在や未来の各〈表象（観念）〉を必要としなかったことを暴露させてくる。序でに〈わたし〉のことはともかく、ここで外的〈世界〉に関していえることは、あのヴェーユが〈自然（世界）は必然性である〉と断言する際、彼女にあつては当然それ以上のことではないとみえるのに、彼にあつては外的〈世界〉（自然）が〈必然性〉であるとも、前記の通り、その〈必然性〉がこうだとも明言されないことにある。だから彼にいう（外的）〈世界〉は〈人間と世界は相対的な存在であり、…相対的な関係である〉とみられているにもかかわらず、〈人間〉の〈意識（即自や対自）（存在）〉に、〈わたし〉にその〈必然性〉たるを受け入れさせる対象ではなくなるという得る。

筆者は今、〈必然性の観念〉以外の〈必然性〉を例にして、外的〈世界〉が〈意識（即自や対自）（存在）〉と〈わたし〉にかかわらぬと述べた（〈意識（即自）（存在）〉における〈必然性の観念〉の方は〈意識（対自）（存在）〉に、〈わたし〉や外的〈世界〉にもかかわるとみることができなかった）が、果たしてこの見方は正しいのかを確認せずにおれない。〈意識（即自や対自）（存在）〉については、これが〈自然（世界）の必然性〉のことでなくとも、この（外的）〈世界〉と関係しないといえるは確かである。なぜならサルトルのめざす哲学が何度か指摘した通り、〈意識〉からする〈即自〉や〈対自〉ならびにその各〈存在〉という諸〈表象（観念）〉をもつばら問題にしていただけだと察知されるからである。だが外的〈世界〉は他方にいう〈わたし〉と関係せざるを得ないといわなくてはならなくなる。その証しとなるは、彼が外的〈世界〉と〈わたし〉のいずれをも〈他者（事物）〉とみたことにあった。そこが両者に共通するがゆえに、両者は次に記すごとくに関係した。すなわちこれも疾うに触れおいたように、外的〈世界〉は〈わたし〉に「付け足しにされ」てかかわっていたと。それでもなぜそういえたかである。繰返してでもいわねばならぬが、まず「行動（運動）」そのものたる、かの〈投企〉などは、〈意識（即自）（存在）〉にではなく、〈わたし〉において可能になった。またこの〈意識（即自）（存在）〉に「付け足しにされた」〈わたし〉が〈投企〉などを実践することで、〈意識（即自）（存在）〉を〈意識（対自）（存在）〉に向かわしめることができた。そして同じ〈意識〉内で〈意識〉を〈即自（存在）〉から〈対自（存在）〉に〈変化〉させんとしたことは同時に、〈わたし〉の外的〈世界〉への接触なしに実現されることではなかった（かつこのことは〈意識（即自や対自）（存在）〉が外的〈世界〉と接していたことを意味させはしない）。だから〈わたし〉を通してしか外的〈世界〉に触れ得なくなる。〈わたし〉なる〈投企〉などこそが〈わたし〉を外的〈世界〉に関係させる。以上から筆者は、外的〈世界〉が〈意識（即自や対自）（存在）〉にではなく、〈わたし〉に「付け足しにされた」といわずにおれなくなるわけである。彼にあつて、自らの何も語りはしないとみえる外的〈世界〉が同じく自らが〈他者（事物）〉以外でないことさえ語らせない〈わたし〉にか

かわるほかないのは、〈かかる関係によって、わたしのために、世界があらわれるようになる〉といわせるからして、もはや外的〈世界〉は〈わたし〉に「付け足しにされた」というしかなくなったのである。換言すると〈わたし〉なる〈投企〉などの「行動（運動）」から、〈意識（即自）（存在）〉が〈意識（対自）（存在）〉に〈変化〉させられるにあつて、それ自身（意識（即自））を、ましてや〈意識（対自）〉を外的〈世界〉の一いちにかかずらわせ得ないのだから、要は〈意識〉はかかる〈変化〉を試みる現実にあるだけだから、この外的〈世界〉（の現実）は〈わたし〉に「付け足しにされ」る以外になかったし、実際その〈わたし〉が〈必然性の観念〉でもって〈わたし〉を彼の哲学構想の一因子として持ち出すことを可能にする〈意識（即自）（存在）〉に、かつその機能に「付け足しにされた」ようになれば、〈わたし〉はまた〈投企〉などに見立てられることさえなく、外的〈世界〉に関係させられることもなかったらうということである。さすればこのことは、例の〈人間存在（個別的な存在）〉や〈この対自とこの世界〉たる語（句）表現がそれぞれ〈意識（即自や対自）（存在）〉と〈わたし〉や外的〈世界〉（上記中の一語〈この世界〉には〈わたし〉と外的〈世界〉が含意されていた）から〈構成される〉謂になると彼に語らせた証左に、しかし筆者にとって、彼の哲学が〈意識（即自や対自）〉と〈わたし〉という区別をもたされて理解されねばならぬといわせる証左にならうか。だがいかに〈意識（即自や対自）（存在）〉のことを中核に据える哲学にみえようとも、〈わたし〉ならびに外的〈世界〉の位置づけが以上のことでしかないとみえるは筆者にあつて不思議でならない。筆者が少なくとも〈わたし〉は〈意識（即自や対自）（存在）〉を導くうえで、「飾りもの（装飾品）」にすぎなくなると前記したのはこのための表記であるといわざるを得ない。

とまれ筆者にすれば、これも一度触れたことであるが、サルトルは〈わたし〉のことと同様に、外的〈世界〉についてもさほど考究してはいなかったように察知される。たとえば彼が〈意識存在〉〈存在意識〉〈即自存在〉〈対自存在〉と記したごとく、各〈存在〉を述べ語る論、要は各〈存在論〉を大いに主張していたのに比べると、〈わたし〉や外的〈世界〉に対しては、確かに〈わたし（の存在）〉や外的〈世界〉（の存在）という表現がみられども、おのおのがたんに〈他者（事物）〉なる〈存在〉として語られるに済ませられるだけだといわざるを得なく、一向に当の各〈他者（事物）〉たる〈存在論〉が何かさえ聞こえてこないのである（だからか、ここでヴェーユに指摘された〈自然（世界）は必然性である〉ことを例に持ち出しても、この〈必然性〉のことは彼にいう外的〈世界〉にとってどうでもよいことであり、つまり〈自然（世界）〉に住まう〈わたし（たち）〉をこの〈必然性〉と関係させることすら彼には論外になり、もっぱら〈意識（即自や対自）（存在）〉に影響させられるとみえる〈必然性〉や（後述しよう）〈偶然性〉のことがその〈存在論〉の一として彼に言及されたといひ得る）。筆者がこうした見方を取るにせよ、前段で示しておいた通り、〈わたし〉と外的〈世界〉がおたがい関係し合うは確かなことであった。これを

証す必要がある。いかに関係させられたかはもとより、外的〈世界〉が〈わたし〉に「付け足しにされた」関係にしかなかった。しかもこのことは〈わたし〉が〈意識（即自や対自）（存在）〉に各「付け足しにされた」ごとくかわらないかぎり、〈わたし〉はあの〈人間存在（個別的な存在）〉や〈この対自とこの世界〉と各記されたなかの一として、彼の哲学のいわば表舞台に登場することはないし、この前提なくば、外的〈世界〉はその出番を失なうどころか、彼に問われもしないと読み取らせ得る。だから〈わたし〉と外的〈世界〉の関係にとって、〈わたし〉がそれこそ〈意識（即自や対自）（存在）〉にかかわらないならば、外的〈世界〉は〈意識（即自や対自）（存在）〉とはむしろのこと、〈わたし〉とも関係させられずに、宙に浮くといわねばならなくなるであろう。そこでなおも〈わたし〉と外的〈世界〉が関係する例を前記した語句〈この机〉で確かめてみるに、外的〈世界〉の一たる、この〈他者（事物）〉は筆者にすると、何よりもまず〈意識（即自）（存在）〉に「付け足しにされた」〈わたし〉に「付け足しにされた」という表現での関係を有することになるのだ。かかる関係は〈意識（即自や対自）（存在）〉が〈他者（事物）〉とみられないために、おたがい〈他者（事物）〉にすぎない〈わたし〉と外的〈世界〉が結びつく関係にあることを含意させていなければならぬし、外的〈世界〉が〈わたし〉を飛び込めて、また〈わたし〉を抜きに、〈意識（即自や対自）（存在）〉と（端から関係はないからして）かわらせ得るなどといったはずはない。要は想起できるように、外的〈世界〉は〈わたし〉たる〈投企〉などとの関係で〈わたし〉に「付け足しにされた」対象であり、〈意識（即自や対自）（存在）〉の対象として「在る（存在する）」のではなかった。なぜなら彼は〈意識（即自や対自）（存在）〉がでなしに、〈わたし〉が外的〈世界〉である、〈他者を対象（客観）化〉するほか、〈他者と同化〉し得ると語っていたからである。なるほど〈意識（即自）（存在）〉としての〈思惟（認識）（観念）する〉働きからみて、この働きが〈わたし〉や外的〈世界〉なる各語の〈表象（観念）〉を可能にさせ、さらに各〈他者（事物）〉と名付けた対象にせしめようが、それでも上記した通り、〈意識（即自）（存在）〉内にとどまるだけである、その機能は実のところ、外的〈世界〉との接触を現実にする関係を持たされないばかりか、ここでも外的〈世界〉が〈意識（即自や対自）（存在）〉自身でないと繰返し得るがゆえか、〈他者（事物）〉に捉えられては、外的〈世界〉は同じ〈他者（事物）〉とされた〈わたし〉の、つまり〈わたし〉たる〈投企〉などの対象にならねばならぬし、このためか、外的〈世界〉は〈わたし〉に「付け足しにされた」ようにしかかわれなかったといわざるを得なかったのである（外的〈世界〉が〈意識（対自）（存在）〉にかかわる〈わたし〉に「付け足しにされた」と指摘できることは〈無〉を語る後段に記しておく）。

以上からここに、サルトルにいう〈人間存在（個別的な存在）〉を〈構成〉する〈意識（即自や対自）（存在）〉と〈わたし（の存在）〉や外的〈世界〉（の存在）の関係を〈無〉の例でもって再度まとめおけば、以下のようになる。すなわちまず、〈意識（即自）（存在）〉を〈無化する〉こ

とで〈意識（即自）（存在）〉は〈無化〉を現出させるが、それ自身〈無〉になることはない（とされる）、〈意識〉を〈対自（存在）〉たらしめ、〈対自（存在）〉を〈無（néant）〉にさせると、そして、この〈対自（存在）〉の〈無〉にかかわらざるを得なくなるのが〈意識（対自）（存在）〉に「付け足しにされた」〈わたし（の存在）〉であり、次いでその〈わたし（の存在）〉に「付け足しにされた」のが外的〈世界〉（の存在）であるとみたのだから、〈わたし〉と外的〈世界〉の各〈存在〉はこの順序にて〈無〉にさせられるのであって、これ以外ではない（〈無（rien）〉の場合もこの順に従う）と。換言すると〈わたし〉が、外的〈世界〉がそれぞれ、〈対自〉に、〈わたし〉に「付け足しにされた」とみておらずに、おのおのはいかなる〈存在〉といかなる〈無〉になり得るかさえ見定められない、要は〈わたし〉や外的〈世界〉は各「在る（存在する）」のか、また〈対自〉や〈わたし〉に各「付け足しにされた」以外にいう〈わたし〉や外的〈世界〉とは何か、さらにその各〈無〉が〈対自〉の〈無〉と同様、〈存在される〉といわせる、この〈無〉とは何かが分からなくなるということである。だがそれでは彼の哲学が成り立たぬと察知されるからして、たとえば外的〈世界〉の方からみて、外的〈世界〉が〈わたし〉に「付け足しにされた」と筆者に断じられたことによって、〈わたし〉とともに、あるいは〈わたし〉の出番と同時に、「在る（存在する）」ことになる（だからここに立ちさえすれば、〈わたし〉は当然「在る（存在する）」といわれなくてはならなくなろう）。

一方の〈わたし〉はどのようにまとめられようか。サルトルに語られた〈対自と即自との関係〉にあって、〈即自〉たる〈意識〉が〈意識〉をこの〈即自〉と〈対自〉に見立て命名し得る機能を有するはむしろのこと、その〈即自〉の〈無化〉をして〈対自〉を〈無〉にせしめる、かかる〈即自（現存在）〉の〈対自（本来的存在）〉への〈意識〉の〈変化（変身）〉をいわば橋渡しするはしかし、当の〈意識〉自身ではおよそなく、〈わたし〉であった。そこに〈わたし〉は位置した（それでも筆者は〈わたし〉が〈意識（対自）〉を現実にするために、登場してきた感を拭いきれない）。なぜなら再度いうが、彼が〈わたしは、…投企である〉と述べた〈投企〉は、これも〈意識（即自）〉で機能した〈表象（観念）〉であるにしろ、これを意味するのではなく、つまりその〈意識（即自）〉内での「行動（運動）」にとどまって済ませられるのでなしに、この〈意識〉（筆者にいわせると〈脳〉）だけでない身体を伴わずにおれない「行動（運動）」をさすことにこそあった。だから彼が〈わたしは、…投企である〉と記した〈わたし〉をここで初出の語となるのであるまいに持ち出さざるを得なくなったのは、筆者がこの〈わたし〉に対して、例の〈対自と即自との関係〉なしに、〈わたし〉は〈意識（即自や対自）（存在）〉に「付け足しにされた」とはいえない以上、これをして〈意識（即自や対自）（存在）〉すなわち〈わたし〉ではないことを、またここは〈わたし〉がかかる〈意識〉以外の何とも結びつか（かかわら）せないことを意図せしめたいがためであったとしか受け取れないのだ。しかして〈わたし〉が〈意識（即

自) (存在) 〉に結びつき (かかわり) を持たなければ、要は「付け足しにされ」ていなければ、〈わたし〉すなわち〈投企〉(など) を通して、〈意識 (対自) (存在) 〉に〈変化 (変身) 〉させられるはおろか、こうした〈対自〉が〈無〉になるわけがないのはもはやいうまでもなくろう。したがって〈意識 (対自) (存在) 〉が〈無〉になるのだから、この〈意識 (対自) (存在) 〉に「付け足しにされた」〈わたし〉は当然、かかる〈対自〉の〈無〉の影響を受けて〈無〉にならねばならぬし、その〈わたし〉に「付け足しにされた」ごとくにかかわる外的〈世界〉もたえず〈わたし〉の順番に登場させられるからして、〈わたし〉の〈無〉に従って〈無〉を現出させずにいないと繰返しおく。

しかしながら前段のことで注意されるべきは、〈わたし〉が〈意識 (即自や対自) (存在) 〉に「付け足しにされた」と書き述べたは筆者であり、サルトルにはこのような表記が見受けられないということである。されど彼に〈対自とは自己を意識として正当化するために、即自としての自己を失なう即自である〉と記された既出引用文が今一度想起されるならば、〈わたし〉は筆者が語ってきたようにしか理解されないにちがいない。この引用文は一に、文頭での語句〈対自とは自己を〉にあって、筆者がすでに触れたように、〈自己〉を〈わたし〉といい換えていたのだから (また他の語句〈即自としての自己〉の〈自己〉も〈わたし〉に換言できた)、この〈自己 (わたし) 〉は〈対自とは自己 (わたし) を〉から後続文章 (以下で説明する) を読むと、〈意識 (対自) 〉と関係せずにいないことを、一に、彼が〈対自とは自己 (わたし) を意識として正当化するために〉と書き続けたことには、〈自己 (わたし) 〉が彼の哲学構築の当初より、〈対自〉なるはむろん、〈即自〉なる〈意識〉でもない (したがって〈自己 (わたし) 〉はこのとき取って付けられる感が否めない) のが示唆されることを、だから一に、かかる〈意識〉すなわち〈自己 (わたし) 〉とみてはならないにせよ、〈自己 (わたし) 〉は少なからずこの〈意識 (対自) 〉にかかわるといえるからこそ、〈対自とは自己 (わたし) を意識として正当化〉できることを、換言するとこの引用語句が端から〈意識 (対自) 〉すなわち〈自己 (わたし) 〉であることを示す文面ならば、彼は〈対自とは自己 (わたし) を意識として正当化する〉とわざわざ断じる必要などなからうが、しかし〈正当化する〉と書き残す以上、引用語句には〈自己 (わたし) を意識として〉 (〈自己 (わたし) 〉が (ここでは) 〈意識 (対自) 〉に与するとして) 認めようとする、彼の配慮が窺われることを、一に、〈対自とは...即自としての自己 (わたし) を失なう即自である〉と記されたことから、〈意識〉がそれ自身において、その〈対自とは〉〈即自〉でもあるとみられる、〈対自と即自との関係〉をかたちづくるにあることを、だから一に、〈自己 (わたし) 〉は〈対自〉のほかに、〈即自〉とも〈関係〉されずにいないことを、要は〈対自と即自との関係〉から、〈自己 (わたし) 〉なくしては、この〈関係〉を〈観念〉にとどまらせずに、現実にはさせ得ないことを、しかして一に、〈自己 (わたし) 〉は〈意識 (対自) 〉にだけではなく、〈意識 (即自) 〉に

さえかわることを、要するにこのかわり（方）こそ「付け足しにされた」（この表記には上記した「取って付けられる」や「与する」各謂も含まれてある）という表現でしかないことを、一に、〈l'en-soi se perdant comme en-soi（即自としての自己（わたし）を失なう即自）〉や〈pour se fonder comme conscience（自己（わたし）を意識として正当化するために）〉という各語句中にみられる〈comme（としてのの）〉から、ここでは今問う、〈即自としての自己（わたし）〉を例に取り上げるにしても、その〈comme（としてのの）〉は〈自己（わたし）〉を〈意識（即自）〉に等しくさせて捉えてはならないことを、換言すると〈自己（わたし）〉は〈comme〉の〈としてのの〉を〈意識（即自）〉に「帰属」しよう、当の訳語で用いられるべきことを（したがって〈自己（わたし）を意識として〉と訳された〈としての（comme）〉も「帰属」の意となるは同様である）、要するに〈自己（わたし）〉は〈意識（即自）〉そのものではなく、〈意識（即自）〉に「帰属」していることを、だがここに人がいかなる「帰属」かと問うならば、筆者はもとより、〈自己（わたし）〉が〈意識（即自）（存在）〉に「付け足しにされた」と答えられることを（したがってこれをはじめ、上記にいう、「〈自己（わたし）〉が〈意識（対自）（存在）〉に「付け足しにされた」ことが証明できたことになる）、そこで〈comme（としてのの）〉を新たに意識していえば、〈即自としての自己（わたし）〉の〈comme〉は〈即自のなかの自己（わたし）〉のような〈のなかの〉とでも解釈され得るであろうことを語らせたのだ。

しかし〈わたし〉が〈意識（即自や対自）（存在）〉ではないとなれば、〈わたし〉は何か。何かはこれも既出引用文〈事物とは、...意識でない（もの）として、（即自の）意識に現前しているものである〉による通り、〈事物〉であり、また他の既出引用文〈他者とは、事実、他人であり、すなわちわたしではないわたしである〉を持ち出すまでもなく、〈他者〉である。前者の文章中の括弧内の語は筆者の付記によるにしろ、その一たる、〈意識でない（もの）として〉の〈もの〉は、他の〈意識に現前しているものである〉とされた、同じ〈もの〉を、要は〈ce（qui）〉をさす。この他の語句の前に括弧にし、〈意識〉を修飾させるごとく用いた〈即自の〉の〈即自〉たる〈意識〉に、いわゆる〈現存在〉に、〈もの（ce（qui））〉が、つまり前者の引用文では〈事物〉が、後者の引用文では〈他人〉なる〈他者〉が、とどのつまり外的〈世界〉の、こうした一いちが〈現前してい〉ては、この一いちに立ち会い得る〈意識（即自）〉こそが唯一その〈事物〉や〈他者〉を〈思惟（認識）（観念）する〉と一応される。このように、〈事物（他者）〉は〈意識〉なかでも〈即自〉に〈現前している〉と筆者に読ませたがゆえに、〈（即自の）意識〉と表記させる括弧を付した次第である。そこでサルトルが〈意識は何ものかについての意識である〉と語っていたことは、〈意識（即自）〉が〈何ものか〉という対象をこの外的〈世界〉の〈事物（他者）〉にだけではなく、当の〈即自〉と〈対自〉や〈わたし〉にみても、それぞれに対し〈認識する〉〈認識される〉を可能にすることまでをも含意させると指摘しておかざるを得なくなる。だから上記

にあって繰返ししてでもいわねばならぬは、〈事物（他者）〉の一いちの対象に〈認識する〉（認識される）を可能にするは〈意識（即自）〉であり、〈無〉である〈対自〉（この〈対自（無）〉による「知る作用」は不可能であった）でも、〈わたし〉でもなかったということになる。これにより、筆者は〈思惟（認識）（観念）する〉〈能動〉とその〈思惟（認識）（観念）〉〈受動〉の働き（作用）をして〈事物（他者）〉をはじめとする諸対象を導出せしめるのが〈意識（即自）（存在）〉であったことを証し得るといえるが、しかし何ゆえ「知る作用」は〈わたし〉ではなかったのか確認せずにはおれない。それは後者の引用文に示唆されている。そこに書かれた〈他者〉は〈他人〉という、外的〈世界〉に「在る（存在する）」一を語り、その意味で〈事物〉と同じにみてかまわぬにせよ、もとより、ここはその外的〈世界〉のことだけにとどまらずに、〈わたし〉が何かをば、〈（他者とは）わたしではないわたしである〉と記すことで、〈わたし〉さえ〈他者〉であるとして明かされ得たと捉えおく必要があるのだ。〈他人〉だから〈わたしではない〉と語られるは当然である。しからば〈他者とは...わたしである〉とみられることから、〈わたし〉が〈他者〉であるとはいえ、〈他人〉である〈わたし〉とは、要は〈わたしではないわたし〉とは何か。「〈他人〉である」や〈わたしではない〉については、前者の引用文中の〈意識でない（もの）〉つまり〈事物〉は後者のそれにいう〈他人（他者）〉であり、〈わたしではない〉ことにも同等なのである。したがって〈わたしではないわたし〉は〈意識でない（もの）（わたし）〉となるほかない。だから〈わたしではない（意識でない）わたしである〉は〈事実〉〈他者〉であるが、されどこの〈他者〉は筆者が疾うに触れた「〈即自（意識）のなかの自己（わたし）〉」ででしかなくなるわけである。要するに〈わたし〉は〈意識（即自ばかりか対自）のなかの他者〉として「在る（存在する）」ということだ。これで「〈意識〉すなわち〈わたし〉」でないことが証明されたし、〈意識でない（もの）〉は外的〈世界〉に「在る（存在する）」〈他人〉を含む〈事物（他者）〉と、〈意識（即自や対自）のなかのわたし（他者）〉となる（〈意識（即自や対自）のなかのわたし（他者）〉とは〈わたし（他者）〉が〈意識（即自や対自）（存在）〉に「付け足しにされた」謂に重なる表現であると理解されねばならない。別言すると〈わたし（他者）〉が〈投企〉などといわれたことは、〈投企〉などが〈意識（即自）〉の「行動（運動）」で生み出された〈思惟（認識）（観念）〉に終始するのではなく、〈わたし〉によって実行されねばならない「行動（運動）」であることを、かつこの〈わたし（投企など）〉以外に、〈意識（対自）〉が〈無〉になり得ないことを意味させたからして、筆者に、〈わたし（投企など）〉は〈意識（対自）（存在）〉にも「付け足しにされた」とみなされねばならぬことにあったのだ。したがって〈わたし（投企など）〉の方が〈意識（対自）〉に〈変化（変身）〉さすだけか、そのとき実際の「行動（運動）」を伴わせては外的〈世界〉に接する（関係する）といえたが、しかしこの〈意識（対自）〉も、そして〈意識（即自）〉もがもはや〈わたし（他者）〉や外的〈世界〉の〈事物（他者）〉とみられることはないし、少なく

も、〈意識（即自や対自）〉にとっては、〈わたし（他者）〉が「付け足しにされた」といわれるほかに、〈わたし（他者）〉と現実結びつく（関係する）ことはなかったと断じられる（なお外的〈世界〉（他者）が〈わたし（他者）〉に「付け足しにされた」からして、〈わたし（他者）〉だけに関係するとみるはすでに証明した通りであるが、外的〈世界〉が〈意識（即自存在）〉の対象になるか否かは後述する）。

ならば〈意識〉わけても〈即自〉とはサルトルにあって、何であるかをまとめおく必要もあるう。何度か述べてきたように、〈意識（即自）（存在）〉がかの「知る作用」を有していた、すなわち〈何ものか〉たる諸対象に対して、〈認識する〉〈認識される〉働きを可能にした。したがって〈意識〉にはかかる「作用（働き）」を為す〈即自〉と、〈実存（無）〉に向かうべき〈対自〉が「在る（存在する）」ばかりであり、この〈意識（即自や対自）〉は〈事物（他者）〉として「在る（存在する）」ことがなかった。一方〈わたし〉や外的〈世界〉について振り返ってみるに、それぞれは〈事物（他者）〉とされたがために、〈意識でない存在〉でしかなく、それゆえ〈わたし（他者）〉は、ましてや外的〈世界〉（他者）はおのおの、当然ながら、〈思惟（認識）（観念）する〉とその〈思惟（認識）（観念）〉に与かる「作用（働き）」を持ち合わせるなどはない、要は〈わたし（他者）〉や外的〈世界〉（他者）にはこうした「作用（働き）」がおよそないということである。さすればこの「作用（働き）」を可能にする〈意識（即自）（存在）〉に備えられし能力とは何かであろう。それは彼が〈observer dans le discours un ordre rigoureux（論の筋道を厳しく守ること）〉と指摘していた以上、〈理性（知性）〉なる能力にほかならなくなる。〈意識（即自）（存在）〉は〈何ものか〉を見透かすべき対象であろう、当の〈即自〉や〈対自〉ならびに〈わたし〉や外的〈世界〉を各〈認識する〉〈認識される〉（それぞれ筆者にいう〈思惟（認識）（観念）する〉〈能動〉とその〈思惟（認識）（観念）〉になる〈受動〉の）「作用（働き）」に掛けられて、かかる〈受動〉たる〈表象〉を（筆者にいわせると〈意識（即自）〉あるいは〈意識（脳）〉の外に）浮かび上がらせ、順次知識（connaissances）の成立に向けて組み立てたり、知識をば彼独特の〈観念〉用語で命名（表現）したりできるのが〈理性（知性）〉の能力であり、〈意識（即自）（存在）〉はこの能力を有していなければならなかったのである。こうして筆者は〈即自〉や〈対自〉をはじめとする、何らかの〈観念〉を作り上げる（se faire）〈理性（知性）〉が〈即自（存在）〉としての〈意識（脳）〉全体を占めて働く以外にないを見て取れたのだから、彼はこの〈理性（知性）〉をもって〈観念〉用語の確立に欠かせない、たとえば〈統合〉という〈観念〉を用意することさえ可能にしたといえども、この〈観念〉をして〈観念論的立場〉に立つ〈認識論〉なる哲学をではなく、〈存在論〉なる哲学をそれこそ〈統合〉せしめるべく意図させていたと察知できるわけである。〈統合〉の語が見出せたのは次の既出引用文であった。すなわち〈世界—内—存在はこの世界を所有せんとする企て（投企）であり、対自に付きまとう効力はこの対自とこの世界との統合機能によって構

成される、ひとつの個別的な存在の具体的な証拠になる」と。この既出引用文をかく記し得る彼にあっても、〈現存在〉である〈意識（即自）（存在）〉によってであり、その「知る作用（働き）」の役割を担う〈理性（知性）〉の能力が文章中の〈観念〉用語とかかる〈論の筋道〉を可能にさせたとみえるはもはや語るまでもなくなる。それでもそこに述べられた〈ひとつの個別的な存在〉とは何かであろう。それは文脈上、〈企て（投企）〉と関連させられねばならぬからして、ここでは〈この対自とこの世界〉たる表記にならざるを得ないことを、あるいは他では〈意識（即自や対自）〉と〈わたし〉で〈構成される〉〈人間存在〉という表現にほぼ等しいことをさす。したがって既出引用文の語句〈この対自〉は〈意識〉に、並列語句〈この世界〉は〈わたし〉に換言されてかまわなくなる。しかし彼が〈個別的な存在〉を〈ひとつの〉と不定冠詞を付したうえは、これが「強調」かそれとも「もうひとつの」を予想させるごとくに捉えられるかを質す必要がある。筆者が後者で受け取る際、つまり「もうひとつの」〈個別的な存在〉とみる際、そこに含まれる〈この世界〉には〈わたし〉以外の、例の外的〈世界〉のことが意味されてなければならない。だから筆者が〈本来的存在〉をめざす〈人間存在〉を〈ひとつの〉や「もうひとつの」区別なしに、たんに「〈人間存在（個別的な存在）〉」として表現したそれ自身には、〈意識（対自）〉と〈わたし〉ばかりか、外的〈世界〉のことが組み込まれると見て取れることになる。この〈意識〉を〈即自〉から、また〈即自〉の〈無化〉から、〈対自〉への、また〈対自〉の〈無〉への〈変化（変身）〉にとって、〈変化（変身）〉は〈意識（内の「行動（運動）」）〉だけで可能にならないと指摘することができた。これを現実にするには、〈わたし（の「行動（運動）」）〉が欠かせなかった。既出引用文中の語〈企て（投企）〉と書かれたはその謂である。なぜなら〈わたし（の「行動（運動）」）は…投企である〉からであった。そのときすでに触れていた通り、「〈わたし〉すなわち〈意識（即自や対自）〉」ではないために、〈わたし〉は〈意識（即自や対自）（存在）〉に「付け足しにされ」ていなければならなかった。さらに、外的〈世界〉が〈人間存在（個別的な存在）〉の〈構成〉因子に加わると断じられたは、外的〈世界〉が〈わたし〉に「付け足しにされた」ように、要は外的〈世界〉はたえず〈わたし〉の出番を待って登場したようにみえたからである。換言すると〈わたし〉なる〈投企〉によって、外的〈世界〉は〈わたし〉にかかわらざるを得ないというのであった。彼は〈わたしのために、世界があらわれる〉と豪語したはこの謂である。

とまれ、以上を踏まえては、筆者が前記した既出引用文中の語〈統合〉をどのようにみることができかねる。サルトルがそこでいう〈統合〉は、〈対自と即自との関係〉からする〈対自と即自と〉の〈統合〉をではなく（〈即自〉から〈対自〉への〈変化（変身）〉は〈意識〉内の〈関係〉だけを示すがゆえに、〈統合〉とはいわない）、同既出引用文に〈個別的な存在〉（要は〈人間存在〉あるいは〈世界－内－存在〉）と書かれる以上、〈この対自とこの世界〉からする〈意識〉と〈わたし〉（この〈わたし〉には外的〈世界〉も含まれた）との〈統合〉をさす以外にない

し、〈わたし〉(外的〈世界〉)をして、〈即自〉を〈対自〉たらしめ、〈対自〉に〈自由〉を勝ち取らせるために用いられた〈観念〉用語の一であると察知される。なぜそういえたか。それは〈わたし〉すなわち〈投企〉(など)なしに、〈対自〉を現出させ得なかったからである。〈投企〉(など)たる〈わたし〉(外的〈世界〉)を通してこそ、〈意識(対自)〉との〈統合〉が可能になったわけである(すでに一見したように、〈対自〉が、〈わたし〉が、外的〈世界〉がこの順次にて各〈無(néant や rien)〉にされるとき、〈統合〉は完了しよう)。その〈わたし〉は次のごとくに導き出された。すなわち繰返しになれど、彼は〈意識(即自)(存在)〉がそれ自身に浮かび出る何らかの対象を〈思惟(認識)(観念)する〉ことで、たとえば〈わたし〉を、その〈思惟(認識)(観念)〉とし、この〈わたし〉に、これもまた〈思惟(認識)(観念)〉でしかない〈投企〉などを〈観念〉としてとどめおくのではなく、実際に実行させては、〈わたし(〈投企〉など)〉が〈意識〉を〈即自〉の〈対自〉への〈変化(変身)〉に結びつかせるからして、例の語句〈この対自とこの世界〉つまり〈意識とわたし〉(〈わたし〉に「付け足しにされた」のが外的〈世界〉であった)でもって〈統合〉される〈人間存在(個別的な存在)〉でなければならぬことを主張していたと。しかし〈意識とわたし〉で成る〈統合〉にとって、筆者が「〈わたし〉は〈意識(即自や対自)(存在)〉に各「付け足しにされた」と指摘しておいたのだから、そこでは〈意識とわたし〉が無関係にみられないと、したがってこの二項の対立はなかろうといえるにもかかわらず、〈わたし〉の方は外的〈世界〉にかかわる(〈意識(即自や対自)(存在)〉の方は外的〈世界〉に直接かかわってはいなかった)が、それでも〈意識(即自)〉であり得ぬからして、その〈理性(知性)〉の能力も持たされない、〈意識〉とは別の一項と受け取られるのであれば、〈人間存在(個別的な存在)〉をかたちづくる〈意識とわたし〉はこの二項を対峙させる二元論として爆り出されてはこないであろうか。両者二項が等しく並べられるとて、これらは〈統合〉と呼ぶことができようか。〈意識とわたし〉にあって、ここで再度「〈わたし〉は〈意識(即自や対自)(存在)〉に各「付け足しにされた」関係にあると筆者に語らせなければ、二元論ではないとはいえなかったであろう。彼自身も二元論と受け取られることを望んでいないはずである。たとえば、〈意識とわたし〉は〈主観性の内部に存在を支えるのは意識である〉と記されていたことでも、筆者にみる、上記した「関係」にしかないことが証明される(要は〈意識とわたし(主観性)〉がかかる「関係」を有するとみられることなしに、彼はこうした引用文を書くことができない)し、彼にいう〈無〉は、二元論をいわば止揚するような〈無〉であり得ないどころか、〈わたし〉が「〈意識(即自や対自)〉のなか(〈内部〉)」に〈他者〉として〈存在〉していなければ、〈意識(対自)〉の〈無は存在される〉といわれるにせよ、この〈存在される〉〈無〉が〈わたし〉に〈わたし〉の〈無〉ともさせるごとくに伝えられることはなかったと推察されるわけである。こうした指摘が可能になることでは、〈統合〉は彼が〈意識とわたし(外的〈世界〉)〉で〈構成される〉〈個別的な存在(人

間存在))の中心をば〈意識(即自や対自)(存在)〉に見据え、かかる〈意識〉に〈わたし(の存在)〉ならびに外的〈世界〉(の存在)を従わせるように組み合わせることによって成ると断じてかまわぬのだ。なぜなら〈わたし(の存在)〉は〈意識(即自や対自)(存在)〉に、外的〈世界〉(の存在)は〈わたし(の存在)〉に各「付け足しにされ」ていたし、このような〈意識〉に対し、彼に〈わたし〉も〈他者〉に、外的〈世界〉も〈事物〉や〈他人〉なる〈他者〉に配置させたはその証しにほかならないからである。

しかし、〈世界－内－存在〉ではじまる既出引用文自体(全体)に関しては、さらなる問題が浮上するように見える。この文章全体を前段から取り上げている語〈統合〉に代表させてみるに、それは〈個別的な存在(人間存在)〉に成るべき〈統合〉が何よりその一たる〈わたし〉をして〈投企〉(など)を可能にさせては、他の一たる〈意識(即自)〉を〈意識(対自)〉(あるいは〈意識(対自)〉の〈無〉)に〈変化(変身)〉せしめることにあったとみなされども、しからばこうした〈統合〉が、〈統合〉のために役立とう〈わたし〉なる〈投企〉(など)が、要はこれらの語を取り入れた既出引用文(文章)全体が実際(現実)に実現されていたこととして語られるとの、それともたんにサルトルなる〈意識(即自)(存在)〉(現存在)によって発せられた〈観念〉として書かれたとのいずれになるかを見極めなければならぬ問題である。なるほど、既出引用文には〈効力〉や〈具体的な〉という、「現実」をあらわし、示唆させるような語が記されている。したがってこれらの語からは、〈統合〉や〈投企〉(など)は〈観念〉をさすよりか、「現実」で実行された語に受け取られるやも知れぬ。果たしてそうか。〈統合〉が「現実」に実現された〈統合〉にみられるならば、〈わたし〉という、実際の「行動(運動)」たる〈投企〉(など)を欠かせるなくなるであろうばかりか、かかる〈投企〉(など)に伴っては、〈意識(対自)〉の、かつ〈意識(対自)〉の〈無〉(すなわち〈自由〉)の各〈表象(観念)〉がもたらされずにいないであろう。しかしながらその「現実」において、わけても〈意識(対自)〉が〈無〉である「現実」において、本当に〈意識(対自)〉や〈無〉という各〈表象(観念)〉が〈意識(脳)〉の外にさえ浮かび上がっているのか。〈無〉がゆえに、何も浮かび出ないとみる。さすれば以上のことは次のようにいわねばならなくなろう。すなわち彼は「現実」における、〈わたし〉なる〈投企〉(など)以前に、その〈投企〉(など)のことを〈観念〉として書き残しておくほかなかったと。つまり既出引用文中に記された〈投企〉(など)をして〈意識(対自)とわたし(外的〈世界〉))を、要はこの〈個別的な存在(人間存在)〉を結びつかせる〈統合〉は筆者にとって、〈観念〉上の〈統合〉をあらわす以外になかったと察知される。換言すると既出引用文全体は〈観念〉に因って成るだけであり、そこに例の〈投企〉(など)のまったき「現実」を同時に盛り込ませるようには綴ることができないと、たとえば〈意識(対自)とわたし(外的〈世界〉))に立つ〈統合〉にあつて、〈わたし〉なる〈投企〉(など)は実際の「行動(運動)」を含意させるごとくに受け取られかねない

が、それでも「現実」の〈投企〉(など)を提示させたくば、既出引用文はそのしかるべき表記を求められるにちがいないということである。だが〈投企〉(など)が「現実」を含ませる語にみなされようにも、その〈投企〉(など)を打ち出す〈思惟(認識)(観念)〉いわば彼にみるこの「理想」があつた文章中に先きに記述されずして、その「現実」は予想だにされないどころか、語られることもなかろうと繰返しおく。もちろん既出引用文は彼がそこに書き込んだ諸〈観念〉を〈論の筋道〉に従わせたうえに成り立つといえる以上、その一〈観念〉をたとえば〈統合〉と記したのはそれこそ彼の〈観念〉であるからして、間違いであるとみてはなるまい。とはいえこの既出引用文にあって、〈統合〉を明確に組み立て得よう〈意識(対自)とわたし(外的〈世界〉)〉や〈わたし〉なる〈投企〉(など)が各〈観念(理想)〉と「現実」とに交錯させられて読み解かれるだけは慎まなければならない。なぜなら〈観念(理想)〉と「現実」の混同は〈矛盾〉の惹起に晒されかねないし、なかでも〈意識〉を命名しての語〈即自〉はむしろのこと、〈対自〉も、かつ〈統合〉さえおよそ「現実」的であることはできないといひ得るからである。だから筆者に問われていた、その〈統合〉や〈わたし〉なる〈投企〉(など)も、ましてや既出引用文全体も〈観念〉で固められ、〈観念〉をあらわす語や文章でしかないと言語されなければならぬわけである。

筆者がそう理解せざるを得ないのはサルトルにとって、ある〈観念〉が「現実」にある〈観念〉通りに実現され体験されると捉えられたとて、彼はどのようにして、「現実」での〈観念〉が、すなわち例の〈統合〉や〈意識(対自)〉の〈無〉がそれぞれ成ることを確認し得たか(「現実」では〈統合〉や〈意識(対自)〉の〈無〉という各〈観念〉は各〈観念〉でなくなろう)を説いてはいないように思えたからである。今「現実」での〈統合〉が成る」と記したことに関し、筆者をはじめとした〈わたし〉たちは、〈統合〉がおよそ彼にいう〈意識(即自や対自)(存在)〉に「付け足しにされた」〈わたし〉とのかかわりがあると、つまりこの〈わたし〉の仲立ちに従った、〈意識(即自)〉から〈意識(対自)〉への〈変化(変身)〉での、〈意識(対自)とわたし(外的〈世界〉)〉の〈統合〉でしかないとみられるのでなくば、何をもって〈統合〉と受け取ることができるかを問えるわけである。〈わたし〉たちは生まれて此の方、たとえば〈統合〉の一例として、〈心身〉要は〈意識(精神)〉と〈身体〉が〈合一〉していることを了解済みである。筆者が彼にいう〈身体〉に関する、多少の見方を後段に示すにしろ、彼はしかし、いわゆる〈心身(身心)合一(一如)〉という〈統合〉をそれほど詳細に語らぬとみえるからか、〈統合〉の〈観念(理想)〉は彼の言のごとく、〈意識(対自)とわたし(外的〈世界〉)〉に対して適当されるだけになる。さすれば筆者が上記しておいたことは、つまりまず一に、「現実」において〈観念〉でなくなろう」とみたことは〈統合〉の〈観念(理想)〉にあって、〈統合〉とは〈意識(対自)とわたし(外的〈世界〉)〉の関係を〈論の筋道を厳しく守る〉ことから引き出させるところに見出されようが、しかし〈意識(即自)〉をして〈意識(対自)〉や〈対自〉の〈無〉に

せしめねばならぬと彼に〈観念〉させても、「現実」では、〈意識〉は〈即自〉はむろんのこと、〈対自〉やその〈無〉という各名前のもとに、〈即自存在〉や〈対自存在〉として「在る（存在する）」のでもない、〈無〉は〈無〉として〈存在される〉のでもない謂になることを語らせずにいないし、そして一に、「現実」での〈統合〉が成る」といえたことは、「現実」にあつて、〈意識（即自）〉が外的〈世界〉への、〈わたし〉なる〈投企〉（など）に駆り立てられては、〈わたし（外的〈世界〉）〉がではなく、何よりも先きに〈意識（即自）〉が〈意識（対自）〉に〈変化（変身）〉し、この〈意識（対自）〉に〈無は存在される〉ように、〈統合〉は〈わたし（外的〈世界〉）〉を通して、〈意識（対自）〉やその〈無〉をめがけ実現させるなかで、その都度新たに生じる〈統合〉でなくてはならぬことを、つまりこの「新たな〈統合〉と記されたことから筆者が疾うに指摘しておいた通り、不断の〈わたし〉たちの生（活）でも、彼に語らせるところの、〈何ものか〉を「現実」にすべく、各〈わたし〉に〈投企〉（など）の実際の「行動（運動）」が課せられているが、かかる「行動（運動）」を「仕事（労働）」と一言することが許されるならば、今携わる、何らかの「仕事（労働）」がこの過程で一区切りできる目途がつけられる諸段階はその度ごとにまさに彼にいう〈意識〉を〈対自〉に、〈意識（対自）〉を〈無〉にし得たことと同じであろうことを、だからわけても〈統合〉において生じよう、〈意識（対自）〉の〈無〉は「現実」に従事している、何らかの「仕事（労働）」の（その都度の）完了をさす以外のことには当てはまらないことを含意させざるを得ないと再度記しておかなければならないことにある。なおこれも繰返しになるが、〈わたし〉たちは、彼が〈意識（対自）〉に〈無は存在される〉と断言したとて、彼の名付けるような〈即自〉や〈対自〉でもない〈意識〉と、筆者のみるような、その〈即自〉や〈対自〉に各「付け足しにされた」〈わたし〉や〈わたし〉に「付け足しにされた」外的〈世界〉でもない〈わたし〉や外的〈世界〉とが依然として各「在る（存在する）」ことを現に確認できているのだから、彼が〈意識（対自）〉の〈無〉によって、〈わたし〉や外的〈世界〉をさえ〈無〉にされると捉えた各〈無〉は筆者に「現実」的であるとは映らない。各〈無〉は何よりもまず〈表象〉であった。だがこの〈表象〉は「現実」では、要は〈意識（対自）〉の〈無〉では、かかる〈無〉であるがために、〈意識（対自）〉に浮かび出されはしないと察知する必要がある。さすれば彼が声高に〈無〉を主張するかぎり、前もって〈意識（即自）〉において、その〈無〉を〈表象（観念）〉しておくことが課せられねばならなくなろう。だから〈無〉は〈観念〉でしかないといえるわけである。それゆえ〈わたし〉や外的〈世界〉の各〈無〉も〈観念〉にすぎなかろう（筆者が〈無〉に関し取り上げた、「現実」での「仕事（労働）」の例にあつて、この「仕事（労働）」が完了したとしても、つまり〈無〉になるといわせたにしても、この〈無〉が〈観念〉であつたればこそ、〈無〉は「現実」を〈無〉にするごとき、「現実」とのかかわりをみせず、たんに「現実」での「仕事（労働）」の完了を意味させるほかないばかりか、「仕事（労働）」に現

に従事している〈意識〉や〈わたし〉と「仕事（労働）」の場である外的〈世界〉（社会）が〈わたし〉たちの目の前に「在る（存在する）」ことには変わりはないとみえるのだ。彼が表記した〈観念〉（用語）はこの〈無〉をはじめとし、当の〈意識（即自）（存在）〉〈意識（対自）（存在）〉〈わたし（の存在）〉や外的〈世界〉（の存在）さえ含ませると思われるからして、枚挙にいとまがないくらいである。なぜならこれらだけでも、〈わたし〉たちが不断用いる用い方と異なるとみえるし、これらは彼独自の用法であるといわねばならぬからである。それに一見していたように、〈無〉たる〈観念〉が「現実」では〈意識（対自）〉の〈無〉なるがゆえに、その〈表象〉を現出させ得ないとみたところでの〈意識（対自）〉の、この〈無〉に従う〈わたし〉や外的〈世界〉の各〈存在〉は、これらが各「在る（存在する）」とされた〈観念〉にとってならまだしも、彼に〈無は存在される〉と語らせる〈無〉として各〈存在〉してはいないことをここに再度確かめずにおれなくなる。そのうえ〈わたし〉たちが何らかの〈観念（理想）〉をもって「現実」に立ち会ってさえ、「現実」は〈観念（理想）〉通りにならないことをしばしば経験しているし、まして〈観念（理想）〉をもたらず〈意識（即自）〉がその〈即自〉から〈対自〉に向かわせたところで、「現実」の〈対自〉といわれる〈意識〉がそれ自らをば〈対自〉だ、その〈無〉だと区別しいわせて〈存在〉されるわけでは到底ないのだ。なおまた〈無〉に関して付記できることとして、彼にいう〈無（néant や rien）〉はヴェーユにいう〈空無（真空）（vide）〉と相異させておかねばならぬことにある。ここはその相異を比較するところではないが、少し語るならば、彼にいう〈無〉が先きに触れたごとく、〈無〉によって〈意識（対自）〉の「死」をはむろんのこと、彼女にいう、〈空無（真空）〉における〈思惟の逃亡〉すら意味させないと見て取ることができる。彼にいう〈無〉が〈思惟〉すなわち〈観念〉を〈逃亡〉させるに等しいと受け止められなくもないが、しかしそうみられたにせよ、つまり彼にあって、〈意識（即自）〉が〈わたし〉なる〈投企〉（など）を通し、〈意識（対自）〉に〈変化（変身）〉せしめられることをこの〈思惟（観念）の逃亡〉と見立てられたにせよ、その〈変化（変身）〉への、彼にいわせよう〈理性（知性）〉の能力が当の〈変化（変身）〉のためにいかに作用しているか、かつ〈思惟（観念）の逃亡〉には彼女にいう、例の〈感受性（量）〉が起因するとされることに比して、この〈理性（知性）〉作用のいかなる負荷もなしに、〈意識〉はその〈対自〉に〈変化（変身）〉させられるのかが何も語られはしないといえると同時に、彼が〈思惟（観念）の逃亡〉現象を体験したとしても、彼はこれをすぐさま〈嘔吐〉や〈不安〉と同じく、拒否するにちがいないとみたは疾うに触れたことである。

ところで筆者が前段に〈心身〉と記しおいたが、このなかでサルトルは〈身体〉についてどのように語っていたのかを、筆者にみる論点を超え出ない範囲で、以下のような引用文を取り上げては、この〈身体〉のことを質す必要がある。

Il (le corps) n'est rien autre que le pour-soi; il n'est pas un en-soi dans le pour-soi. ⁽³⁾

身体は対自よりほかの何ものでもない。身体は対自のうちの、ひとつの即自でない。

Précisément parce qu'il (le corps) est insaisissable, il n'appartient pas aux objets du monde, C'est-à-dire à ces objets que je connais et que j'utilise. ⁽⁴⁾

まさしく身体は捕えどころがないために、世界の諸対象に、すなわちわたしが認識したり、利用したりする諸対象に属しているのではない。

Elle (la conscience) existe son corps. ... Il est évident...que la conscience ne peut exister son corps que comme conscience. Ainsi donc mon corps est une structure consciente de ma conscience. ⁽⁵⁾

意識は意識の身体を実存（存在）する。... 明白なことは... 意識は意識としてしか、意識の身体を実存（存在）することができないと。したがってわたしの身体は、わたしの意識のひとつの意識的構造であると。（括弧内は筆者）

上記三引用文のうちで、筆者が今問う〈身体〉に関して気にかかる、その表現は、一番目の引用文から見当がつこう〈意識の身体（son corps）〉のことはまだしも、〈わたしの身体（mon corps）〉とされたことであり、ほかに、〈身体〉に直接関係しないところで記された〈わたしの意識（ma conscience）〉と〈わたしが認識する（je connais）〉や〈わたしが利用する（j'utilise）〉という、〈わたしの身体〉と表記されたと同様の〈わたしの〉、さらに〈わたしが〉、つまり〈わたし〉なのである。なぜなら〈身体〉と〈意識〉を形容する〈わたしの〉や文章の主語に使われる〈わたしが〉である、〈わたし〉の表現は、筆者のこれまでの主張を、たとえば「〈意識〉すなわち〈わたし〉ではない」とみてきた主張を覆させかねないからである。したがって、筆者は、〈身体〉と〈意識〉に修飾される〈わたしの〉や文章中の主語たる〈わたしが〉が彼による誤記か誤植ではないと判断できるならば、果たして筆者の主張が適當するか否かを以下に、〈身体〉のことにだけでなく、〈わたし〉のことにに関してさえ筆者なりに明らかにさせておかねばならなくなろう。まず〈身体〉のことから取り上げる。それも〈身体〉を三番目の引用文中に書かれる、〈意識の（son）〉や〈わたしの（mon）〉の所有形容詞付きの語句でなしに、一番目の引用文の冒頭の定冠詞（le）付きの語句として質すことにする。そこで真先きに確認せずにおれないは彼に、一に、例の〈心身〉をば〈意識〉と〈身体〉による構成であるといわせるし、一に、〈意

識〉は〈対自〉や〈即自〉という各〈存在〉で成り、その各現出を相互に繰返し実現させると語らせる〈存在〉であった。〈身体〉については、以上を踏まえつつ、一番目の引用文を読むと、〈身体〉が彼にどう捉えられていたのかが明確になってくる。さすれば〈身体〉は他の引用文にも、〈対自は身体であるという対自の本質 (la nature du pour-soi qu'il soit corps)〉⁽⁶⁾と記される通りにしかない、すなわち一番目の引用文によるように、〈身体は対自よりほかの何ものでもない〉と。だから筆者は、〈身体〉が〈対自〉にみられると、それだけでなく、ここから、三番目の引用文中にあった、〈意識の (son)〉が〈身体〉にかかって〈意識の身体〉となった語句の所有形容詞をば〈対自の〉とみなし、〈対自の身体〉という語句にいい換え得ると、あわせて〈ひとつの意識的構造〉と書かれた語句のうち、〈意識的〉を〈意識〉たる〈ひとつの構造〉といわせるがゆえに、その〈意識的構造〉を〈対自的構造〉にいい直し得ると断じてかまわなくなるわけである。〈身体〉が〈対自〉に等しくみえるように述べられるは筆者にとって、二番目の引用文の冒頭文に〈まさしく身体は捕えどころがない〉と書かれることにあるほかに、〈身体〉が彼に〈対自〉のいわば定義とされるがごとき語句と、要は〈それが存在しないものであり、それが存在するものではない対自 (le Pour-soi...qui est ce qu'il n'est pas et qui n'est pas ce qu'il est)〉と同様であることを次に記す引用文でも知らされ得るからである。

Je suis mon corps dans la mesure où je suis; je ne le suis pas dans la mesure où je ne suis pas ce que je suis; c'est par ma néantisation que je lui échappe. ⁽⁷⁾

わたしはわたしが存在するかぎりにおいて、わたしの身体である。わたしはわたしが存在するものでないかぎりにおいて、わたしの身体でない。(この〈存在するものでない〉) わたしがわたしの身体から逃れるのは、わたしの無化によってである。(括弧内は筆者)

〈対自〉を定義するような語句や上記引用文中の各一部分〈le Pour-soi... (qui) n'est pas ce qu'il est〉と〈je ne suis pas ce que je suis〉にあつては、たとえば前者の〈le Pour-soi (il) est〉の箇所以後者の〈je suis〉を当てはめ得るために、そこから〈対自〉と〈わたし〉が各〈存在するものでない〉として共通し、この語句〈対自〉と一文中の〈わたし〉をこうした〈存在〉にみることは「同様である」といわせ得よう。かつ〈身体〉にあつては、前記三番目の引用文中の〈わたしの身体〉(これは上記引用文にも見出される語句である)と〈意識(対自)の身体〉と語られた各語句の〈身体〉がそれこそ同じ〈身体〉をあらわすとみなされるならば、〈わたしの〉はおよそ〈意識(対自)(の)〉と変わりはない〈わたし〉と受け取られてかまわないであろう。要するにこの〈身体〉に次いで言及が課せられる〈わたしの身体〉という〈わたし〉は実は今問うたばか

りの、あたかも〈捕えどころがない〉とされた〈身体〉や〈意識（対自）〉のそれぞれと同様にみられるであろうということである。しかしこの三者は何ゆえ同列的同時に関係し合わねばならぬといわれるかである。〈対自〉と〈即自〉を有する〈意識〉が〈即自（現存在）〉のままで〈存在する〉だけでなく、可能なるかぎり、〈対自（本来的存在）〉に向けて〈存在〉せんとするにあって、〈即自〉にでなしに、〈わたし〉に〈投企〉（など）をさせることができたが、そのとき、〈投企〉（など）である〈わたし〉は〈わたし〉がその「行動（運動）」するに欠かせない〈身体〉をたえず伴わすことにより、〈意識〉のめがける〈対自〉と〈わたし〉や〈身体〉がともに（同列同時に）語られることが可能になるのだ。したがって、上記引用文の前半の〈わたしはわたしが存在するかぎりにおいて、わたしの身体である〉には、この〈意識（対自）〉における〈わたし〉や〈身体〉が同列同時に述べられていると察知されるほか、その〈存在する〉は〈être〉であって、〈exister（実存する）〉の語ではないにしろ、前記三番目の引用文に二度〈exister〉が使用されるからして、この〈exister〉に等しいとみるならば、繰返しいうが、〈わたし〉や〈身体〉はともに〈意識（対自）〉を語りあらわすときに用いられる各語になろう。

だから前記一番目の引用文に綴られる通り、〈身体は対自のうちの、ひとつの即自でない〉のは当然なわけである。つまり〈身体〉は〈即自でない〉だけか、〈即自〉にかかわっていないことを示唆させる。しかしかかる表記中、サルトルはなぜ〈対自のうちの、ひとつの即自〉と記したか。筆者は彼のこうした語句表現にとって、たとえば〈対自〉自体（のなか）に〈即自〉が組み入れられてあると聞かされては、それが正しいか否か紛らわしくなるからして、これを避けるに、彼にいう〈意識〉構成の一が〈対自〉であるといわれたがゆえに、〈対自のうちの〉をむしろ〈意識のうちの〉といい換える方が〈意識〉構成の他の一である〈即自〉として明確にできようし、何より分かりやすくなると思える。だが〈身体〉は実際〈即自でない〉とされたのだから、筆者はこれを確かめるべく、ここに上記引用文中の、〈わたしはわたしが存在するものでないかぎりにおいて、わたしの身体でない〉という一文を持ち出すことにする。これはすでにみた、〈対自〉における〈わたし〉や〈身体〉のことをさしてはいない以上、なかでも〈対自は身体である〉とされた、この〈身体〉にとっては、〈対自〉でありつつも、〈対自〉でないことを意味させる。そこで〈身体〉がすわこそ〈即自〉になるのかと問うと、〈身体〉は〈即自ではない〉という。つまり〈身体〉は〈意識〉構成の一たる定義〈それが存在するものである即自（l'En-soi qui est ce qu'il est）〉として捉えられないし、あるいはかかる〈即自〉（の対象）にすら当てはまらなくなる。要は〈意識（即自）〉にあって、〈身体〉は〈存在するものでない〉のだ。以上は〈まさしく身体は捕えどころがない〉といわれるゆえんである。そこからはまた、〈身体〉が〈わたしの身体〉と表記されると、この〈わたし〉を〈身体〉ならびに〈意識（対自）〉にかかわらせ得るとみることができるからして、〈身体〉は筆者が繰返し主張してきた、〈意識（対自）〉に「付け足

しにされた」〈わたし〉に「付け足しにされ」といわなければならないのだ。なぜならその〈わたし〉に「付け足しにされた」と指摘できるは、〈身体はわたしがそれであるところの用具である (Le corps est l'instrument que je suis)〉⁽⁸⁾ ほかないからである。しかし前記引用文に残しおいた問い〈ひとつの即自〉というなかで〈ひとつの〉とされたことに関してはどうか。ここで〈ひとつの〉に対する、例の「もうひとつの」の表現を想起しよう。もし筆者がこの表現がみられるとし、それは区別のためであったとみなすならば、「もうひとつの」〈即自〉とはいわずと知れたこと、前記二番目の引用文に、〈身体〉は〈世界の諸対象に...属しているのではない〉と記された〈世界の諸対象 (〈他人〉や〈事物〉)〉に、これを筆者にいわすと「外的〈世界〉」に、彼に別言させると〈即自存在〉に充当する以外になろうし、〈身体〉はだから、「もうひとつの」外的〈世界〉たる〈即自存在 (世界の諸対象)〉に〈属してい〉ないどころか、これによって当の〈即自 (存在) でない〉と記されたことをば、〈意識〉構成の一たる〈即自 (でない)〉ことに重ね合わせて強調させるかのように受け取られるのだ。〈身体〉は〈意識 (対自)〉に〈属する〉といえるとして、上記引用文に書かれるごとく、〈身体〉自ら〈無化〉の働きを持ち得ぬから、〈意識〉即自でないということであり、〈対自〉以外の表記では、つまり〈意識〉が〈即自〉では、〈身体〉は〈わたしの身体〉と語られるかぎり、〈即自〉に「付け足しにされた」〈わたし〉に〈属する〉といわなければならないわけである。さらに〈身体〉がどのように〈属する〉かについて、彼にいう〈わたしたち自身の身体は他者の身体として、わたしたちにあらわれ得る〉⁽⁹⁾ を参照すると、〈他者の身体〉のごとく〈属する〉ようである。このことは〈対自〉や〈即自〉からみて、それぞれ〈対自〉が〈即自〉をして、また〈即自〉が〈対自〉をして各〈身体〉を〈他者の身体〉たらしめることを示唆させる。しかし〈身体〉が〈対自〉で〈存在する〉といえども、〈対自〉が〈無化〉の〈無〉になつては、即〈即自〉に立ち戻るとされるがゆえに、この〈即自〉にあって、〈対自〉でいわれる〈身体〉は〈他者〉として、しかも「死」であり得ない、生きた〈身体〉として〈即自〉に「付け足しにされた」〈わたし〉に関係し〈存在〉している (なぜ〈わたし〉かは〈身体〉は〈即自でない〉からである) し、〈対自〉での〈身体〉は〈他者〉になるように〈属する〉わけである。かつ〈意識 (対自や即自)〉における各〈他者の身体〉とみなした〈他者〉と外的〈世界〉を〈他者〉とを同じ〈他者〉とみてはならない。それは〈意識〉と外的〈世界〉が関係ないところで語られる〈他者〉にすぎないからである (なお前記三番目の引用文で〈わたしの身体は、わたしの意識のひとつの意識的構造である〉と語られたうちの、〈ひとつの〉に「もうひとつの」は何かを取り出すと、何かはもとより〈即自〉になり、〈わたしの意識の即自的構造〉に見て取れようが、しかし〈わたしの身体〉との関係では〈身体〉は〈即自でない〉ことに注意しておかねばならないと付記しておく)。

そこで〈身体〉や〈意識 (対自や即自)〉は以上のように、そのうえ二番目の引用文で〈わた

しが認識したり、利用したりする)とした〈わたし〉はどのように捉えられるかを聞くために、これらを他の引用文に拾い出してみなければなるまい。

L'esprit ne produit pas ses propres sensations et, de ce fait, elles lui demeurent extérieures.
...L'esprit est ses propres sensations tout en demeurant distinct d'elles. ⁽¹⁰⁾

精神は精神自身の諸感覚を産出しない。したがって、諸感覚は精神にとって、うわべのままではある。...精神は諸感覚とは別のままでありながら、精神自身の諸感覚である。

Elle (la notion de sensation) est purement inventée. ...Il faut la (la sensation ou la notion de sensation) rejeter délibérément de toute théorie sérieuse sur les rapports de la conscience et du monde. ⁽¹¹⁾ (括弧内は筆者)

感覚(という観念)はたんに作られる(ものである)。...感覚(という観念)は意識と世界との関係に関する、確かな理論からは決然と締め出されなければならない。(括弧内は筆者)

On pourrait définir le corps comme la forme contingente que prend la nécessité de ma contingence. ⁽¹²⁾

わたしたちは身体を、わたしの偶然性の必然性が手に入れる偶然的な形態として定義することができるにちがいない。

Le pour-soi est soutenu par une perpétuelle contingence. ⁽¹³⁾

対自は不断の偶然性によって支えられている。

Il est tout à fait contingent que je sois. ⁽¹⁴⁾

わたしが存在することは完全に偶然的なのである。

Tout cela, en tant que je le dépasse dans l'unité synthétique de mon être-dans-le-monde, c'est mon corps. ⁽¹⁵⁾

わたしがわたしの世界－内－存在の統合的一致において、そのことすべてを乗り越えるかぎり、わたしの身体である。

〔続〕

註

- (1) これは前号「ヴェーユと実存主義者たち⑤」(新潟大学大学院現代社会文化研究科、「フランス文化研究」、第4号、2011年3月)に続く拙論である。
- (2) Jean-Paul SARTRE 《L' être et le néant》(Gallimard) P.18 (Il suffit que j'aie conscience d'avoir conscience de cette table pour que j'en aie en effet conscience.)
- (3) Ibid., P.356
- (4) Ibid., P.377
- (5) Ibid., P.378 (サルトルはここに用いられた動詞〈exister〉に対し、この引用文前に、〈en se servant comme d'un transitif du verbe exister (動詞exister を他動詞に用いて)〉として使用することを予め断っている)
- (6) Ibid., P.357
- (7) Ibid., P.375
- (8) Ibid., P.409
- (9) Ibid., P.408 (Notre propre corps peut nous apparaître comme le corps d'autrui.)
- (10) Ibid., P.361
- (11) Ibid., P.362
- (12) Ibid., P.356
- (13) Ibid., P.121
- (14) Ibid., P.356
- (15) Ibid., P.376 (なお訳文中の〈そのことすべて〉に、サルトルは、〈わたしの階級 (ma classe)〉〈わたしの国籍 (ma nationalité)〉〈わたしの生理的構造 (ma structure physiologique)〉〈わたしの性格 (mon caractère)〉と〈わたしの過去 (mon passé)〉を当てている)